蒲郡市議会傍聴記（下）

地方政治クリエイト　伊藤　秀昭

総力戦で閉塞状態を打ち破れ

■クルーズ船寄港時代

国は2020年の訪日外国人客数を4000万人に増やす目標のうち、500万人をクルーズ船で達成するとしていることから、クルーズ船寄港時代の海のまちづくりについて質問した大向正義氏（自民）は、民間活力を活用した市民会館を含めたウォーターフロント計画に期待した。

産業環境部長は蒲郡市においても15年には13万人、昨年はそれを上回る外国人観光客があり、海外からの大型客船の寄港の機会を期待しているとした。

大向氏は「海を体感できる蒲郡の観光を」と主張したが、蒲郡の魅力を生かした寄港地づくりが重要ではないだろうか。

■公共施設の再編

蒲郡市は人口一人当たりの公共施設の保有面積は4・53平方㍍で全国平均より2割以上多く、県内38市の中で第4位となっていることから、老朽化した公共施設の再編計画について竹内滋泰氏（自民）が質問した。

総務部長は市内全域の住民が利用する「全市利用型」施設については、複合化や集約化により、個別計画を策定して取り組んでいくことを説明。小中学校や保育園、公民館、児童館などの「地区利用型」施設については、新年度以降、中学校区ごとに総代や地域住民に参加してもらいながら、地域の核となり、地域コミュニティーの維持・活性化につながるように、優先順位を決めて計画を策定していくとした。

公共施設を再生することができるのか、財源確保も含めて、注目していきたい。

■市職員の働き方改革

尾崎広道氏（自由クラブ）は市職員の時間外勤務については、本年度は1月末で平均12・1時間、一番多い所属では同月末で59時間となっていることなどから、市職員の働き方改革について取り上げ、残業等の縮減に向けた取り組み等について質問した。

企画部長は、7、8両月の水曜日にノー残業デーの実施の徹底や「定時までに仕事を終わらせる」という組織風土の醸成など、職員の健康を確保するうえでも長時間労働の削減を図り、生産性の向上に取り組むとした。

尾崎氏は民間会社で働いてきた経験から市職員の働き方や会議のあり方から「良く働き、良く休め」をモットーに、笑顔で気持ちの良い職場をつくるよう期待した。

■新産業創出

伴捷文氏（自民）は、蒲郡市の総生産の14年度は2428億円で10年前に比べマイナス4・7％、事業所数は5年間で9・0％の減少、従業員数も6・4％の減少と縮小状態であることから、地場産業に加えて、新産業の振興を図る必要があると指摘し、蒲郡商工会議所に設立する予定のイノベーションセンターについて期待した。

産業環境部長は地方創生関連の補助事業として設置を支援するとし、会議所や金融機関と連携し、創業支援に取り組む考えを示した。

これらの背景には「がまごおり創業支援ネットワーク」による創業支援が実を結びつつあることが期待されるが、オール蒲郡の総力戦で閉塞状態を打破していくことを望みたい。

◇

3日間の「蒲郡市議会傍聴記」をまとめている間にも森友問題と稲田問題で、世間は騒がしい。

その中で蒲郡市出身・千賀滉大投手のワールド・ベースボール・クラシック（WBC）での活躍が大きな感動を呼んでいる。ほとんど無名だった彼を支えたものは、はい上がるための「必死の努力」。

甘えを排除し、蒲郡創生にはい上がってほしい。